「に」の識別 確認テスト（古典文法） 解答・解説

■ 解答・解説

問1 ①格助詞。「都」という体言（名詞・場所）に付き、「のぼる」という動作の帰着点を示している。根拠＝直前が体言で、移動先（～へ・～に）を表すから格助詞。

問2 ①格助詞。「家」という体言に付き、とどまる場所を示す。現代語訳「(雨が降ったので、外出せず）家にとどまった」。「に」は「～に」のまま訳せる。

問3 ③断定の助動詞「なり」連用形。直後に「あり（ありけり)」が続くことが手がかり。体言「人」＋「に」＋「あり」の形で「～である」と訳す。

問4 ②接続助詞。直前の「聞く」は連体形。連体形＋「に」で「～すると・～したところ」の意。現代語訳「鳥の声を聞くと、心がすがすがしくなった」。

問5 ④完了の助動詞「ぬ」連用形。直前の「咲き」は連用形、直後に「けり」が続く。連用形＋「に」＋「けり」で「～てしまった・～た」と訳す（「咲いてしまった」)。

問6 ⑤形容動詞ナリ活用連用形活用語尾。「のどかに」で一語。終止形は「のどかなり」。

問7 ⑥ナ変動詞連用形活用語尾。「死に」で動詞「死ぬ」の連用形。紛らわしい理由＝直後に「けり」が続くため、形のうえでは「連用形＋に＋けり」と同じに見え、完了「ぬ」の連用形「に」と取り違えやすいから。実際は「死ぬ」というナ変動詞そのものの活用語尾である。

問8 ⑦副詞の一部。「さらに」で一語の副詞（下に打消を伴い「まったく～ない」の意で使うことが多い)。「に」だけを切り離せない。

問9 ③断定の助動詞「なり」連用形。「にて」の形に着目する。体言「人」＋「にて」で「～であって・～で」と訳し、断定「なり」の連用形「に」＋接続助詞「て」と分析できる。

問10 ④完了の助動詞「ぬ」連用形。直前の「書き」は連用形、直後に「たり」が続く。連用形＋「に」＋「たり」で「～てしまった・～た」(「書いてしまった」)。

問11 ⑤形容動詞ナリ活用連用形活用語尾。「静かに」で一語。終止形は「静かなり」。

問12 ②接続助詞。直前の「ける」は連体形。連体形＋「に」で逆接「～のに」の意。現代語訳「約束したのを破ったのに、たいそう恨めしい」。

問13 ①格助詞。「暁」という時を表す体言に付き、「に」は時を示す（「明け方に」)。

問14 ⑥ナ変動詞連用形活用語尾。傍線部は「往に」に属する。「往ぬ（去る・行ってしまう)」はナ変動詞で、その連用形が「往に」。直前の「山に」の格助詞「に」とは別で、傍線部は動詞の活用語尾である（直後に「けり」が続く点も完了と紛らわしいが、語そのものの一部)。

問15 ③断定の助動詞「なり」連用形。直後に「侍り」が続くことが決め手。体言「玉」＋「に」＋「侍り」で「～でございます」と訳す丁寧な断定。

問16 ⑦副詞の一部。「つひに」で一語の副詞（「とうとう・最後に」の意）。「に」だけを切り出せない。

問17 同じ種類。どちらも③断定の助動詞「なり」の連用形「に」である。③は直後が「あり」、⑮は直後が「侍り」と語は違うが、いずれも体言＋「に」＋（あり／侍り）の形で「〜である・〜でございます」と訳せる断定の用法で一致する。

問18 決め手は直前の語の活用形。断定「なり」連用形の「に」は体言（または連体形）に付くのに対し、完了「ぬ」連用形の「に」は必ず動詞などの連用形に付く。③は体言「人」＋「に」だから断定、⑤は連用形「咲き」＋「に」だから完了、と直前の語で判別できる。

問19 格助詞「に」は体言に付いて場所・時・帰着点などを表し、下に「あり・侍り」を伴わない（①「都に＋のぼる」）。断定「なり」連用形の「に」も体言に付くが、直後に「あり・侍り・おはす」が続くか「にて・にして」の形をとる（③「人に＋あり」）。よって直後に「あり」類があるかどうかが区別の決め手で、直前が体言である点は共通するため直後の語で判断する。

問20 ⑥⑦⑧⑪⑯すべて。⑥「のどかに」・⑪「静かに」は形容動詞ナリ活用の活用語尾、⑦「死に」はナ変動詞の活用語尾、⑧「さらに」・⑯「つひに」は副詞で、いずれも「に」が語の一部（活用語尾や語の一部）となっている。指定された範囲（⑥⑦⑧⑪⑯）はすべて「語の一部としての『に』」に当たる。

問21 ⑤「咲きにけり」も⑩「書きにたり」も、直前が連用形（咲き・書き）、直後が助動詞（けり・たり）で、間の「に」はともに完了の助動詞「ぬ」の連用形である。連用形＋「に」＋（けり／たり）という同じ構造をとるため、両者は同じ種類だといえる。

問22 ④完了の助動詞「ぬ」の連用形。本文中では⑤「咲きにけり」が該当する（直前「咲き」＝連用形、直後「けり」）。